知りたい！宮城の歴史

宮城県内 史跡探訪マップ付き！

初めて世界一周した日本人

石巻若宮丸漂流民物語

日本人で初めて世界を一周したのは、石巻の千石船「若宮丸」の乗組員
津太夫・儀兵衛・多十郎・左平の４人だった！
しかし、それは自分たちが望んだ旅ではなかった――

冬の北太平洋を５ヶ月漂流

プラネタリウムを見物

シベリアを馬車とソリで横断

流氷に乗り上げる

ロシアで働きながら７年生活

ロシアの皇帝夫妻に謁見

ホーン岬と南極の間であわや遭難

大西洋を横断

南太平洋で“鬼”を見る

長崎で幽閉生活

そして、故郷の寒風沢・室浜へ帰ってきた・・・

苦難と驚きに満ちた世界一周の物語！

千石船と漂流民

千石船「若宮丸」模型

「千石船」というのは、「米を千石（150トン＝15万kg）も積むことができる大きな荷船（貨物船）」のこと。しかし実際の積載量は数百石（数十トン）程度から二千石（300トン）くらいまで、いろいろな大きさの船があり、若宮丸は八百石（120トン）積であった。大きな一枚の帆で風を受けて走る木造帆船である。

天下泰平の江戸時代は、日本全国で商品流通が盛んになり、米・酒・肥料・木綿・古着・食器など様々な商品が遠くの地に運ばれて取り引きされた。この輸送に活躍したのが千石船で、各地の大きな湊は「出船千艘、入船千艘」といわれるほど多くの船が出入りした。

船の運航は「板子一枚、下は地獄」といわれるように危険がつきもので、海難事故も多く発生した。嵐で波にもまれて舵が壊れ、転覆を防ぐために帆柱を切り倒した船は、運よく嵐を乗り切っても漂流するしかなく、どこかの浜に漂着するのを祈ることしかできなかった。潮に流されれば日本を遠く離れてしまう。たくさんの船乗りが海に消えていった。しかし、中には中国や東南アジア、アリューシャン列島などに漂着したり、洋上で外国船に救助される幸運な船乗りもいた。

こうして生き延びた幸運な船乗りたちが「漂流民」として歴史に名前を残している。しかし、異国に流れ着いた漂流民の多くは帰国できないまま亡くなった。若宮丸漂流民の津太夫たち４人は、漂流を生き延び、さらに異国から日本に帰ってくることのできた数少ない漂流民である。

若宮丸の16人の旅路はこの中！

●若宮丸 16人の乗組員たち 出身地・出航時の年齢と漂流後の運命

※名前の表記は史料によって違う場合があります。

船長。乗組員の監督や荷物の輸送管理など船全体の責任者

船頭
石巻（石巻市）
平兵衛 31歳
船主・米澤屋平之丞の息子。アリューシャン列島へ上陸直後に死亡。享年32。

潮の流れや天気などを読む運航の責任者

楫取
寒風沢（塩竈市）
左太夫 51歳
ペテルブルグへ向かう途中で病気になり、イルクーツクへ戻る。

荷物の仕入や会計事務の責任者

賄
室浜（東松島市）
儀兵衛 32歳
世界一周して帰郷。文化３年（1806）没。享年45。

水主たちをまとめ、船内の仕事を取り仕切る水主頭

船親父
小竹浜（石巻市）
吉郎次 67歳
イルクーツクで寛政11年（1799）に死亡。享年73。

荷物の積み下ろしや船内の仕事を行う乗組員

水主
寒風沢（塩竈市）
津太夫 49歳
世界一周して帰郷。文化11年（1814）没。享年70。

水主
寒風沢（塩竈市）
左平 31歳
世界一周して帰郷。文政12年（1829）没。享年67。

水主
寒風沢（塩竈市）
民之助 30歳
イルクーツクで受洗*し、ロシアにとどまる。

水主
寒風沢（塩竈市）
銀三郎 29歳
ペテルブルグへ向かう途中ペルミで病気になり、イルクーツクへ戻ったか。

水主
小竹浜（石巻市）
茂次郎 29歳
ペテルブルグで受洗*し、ロシアにとどまる。

水主
石巻（石巻市）
市五郎 29歳
イルクーツクへ向かう途中、ヤクーツクで死亡。享年32。

水主
石巻（石巻市）
八三郎 25歳
イルクーツクで受洗*し、ロシアにとどまる。

水主
石巻（石巻市）
善六 24歳
イルクーツクで最初に受洗*。世界一周の時、通訳としてカムチャツカまで同行。ロシアにとどまる。享年47。

水主
室浜（東松島市）
多十郎 23歳
世界一周して帰郷。文化３年（1806）没。享年36。

水主
石浜（塩竈市）
辰蔵 22歳
イルクーツクで最初に受洗*し、ロシアにとどまる。

水主
石巻（石巻市）
清蔵 年齢不詳
ペテルブルグへ向かう途中で病気になり、イルクーツクへ戻る。

炊事など雑用をする見習い船員

炊
石巻（石巻市）
巳之助 21歳
ペテルブルグで受洗*し、ロシアにとどまる。

*受洗：洗礼を受けてロシア正教に入信すること。ロシア国民として認められロシアでは生活しやすくなるが、キリスト教が禁じられていた日本に帰れなくなることを意味した。

5ヶ月の漂流は苦難のはじまりに過ぎなかった！

数奇な運命に翻弄され 日本人として初めて 世界を一周してしまった男たちの 長い長い12年の旅路

1 石巻－北太平洋－アリューシャン列島
若宮丸の遭難と漂流

寛政5年11月27日（1793年12月29日）、千石船若宮丸は約1,300俵（約80トン）の米と材木を積み、16人の乗組員で石巻湊を出て江戸へ向かった。しかしその2日後、福島県の塩屋崎沖で暴風雨にあい遭難。舵が壊れ、帆柱も切り捨てた若宮丸は、風と海流に身を任せ、真冬の太平洋を東へ北へと流されていった。

積み荷の米と雨水で飢えと乾きをしのぎながら、漂流すること5ヶ月半。初めて見えた島影は、春だというのに雪に覆われたアリューシャン列島の小さな島だった。16人の乗組員全員が生きてその島に上陸することができたが、その直後、船頭平兵衛が亡くなる。残った15人は異国の島に平兵衛を埋葬した。

2 アリューシャン列島－オホーツク
極寒の島でロシア人に出会う

漂流民たちは初めて見る異国の人――鳥の羽や海獣の毛皮を着たアリュート人――に驚いたが、彼らは親切に漂流民たちを助けてくれた。島にラッコ漁基地を置いていたロシア人の援助も受け、極寒の島で漁の手伝いなどをしながら約11ヶ月滞在。

当時ロシアは日本との通商を望んでいて、その交渉に漂流民が役立つと考えていた。漂流民たちは、シベリア最大の町イルクーツクへ送られることになった。

まず、ラッコの毛皮を集めるロシア人の船に便乗してオホーツクへ向かう。その途中、船が進路を誤って流氷に乗り上げた。

オホーツクからイルクーツクまでは馬で5～6ヶ月かかるため、15人を3グループに分けて順次出発。馬に乗って野宿をしながら道なき道を行く過酷な旅で、第3グループの市五郎が途中のヤクーツクで病死。

1年半後イルクーツクにそろった漂流民は14人になっていた。

3 イルクーツク
7年間のイルクーツク暮らし

イルクーツクは、3,000戸もの家々が立ち並ぶバイカル湖畔の美しい町。漂流民たちはここで7年間暮らすことになる。

この頃までに日常会話ができるくらいのロシア語を覚えていたらしく、初めて見る異国の風俗――住居、トイレ、風呂、食べ物、飲み物、服装、生活習慣などをのちに詳しく語っている。

ロシア政府からの支給金はあったが暮らしていくには足りず、日雇いの仕事やバイカル湖での漁、麦で酒を作って売るなどしてロシアの生活になじんでいった。

このイルクーツクで善六・辰蔵・民之助・八三郎の4人がロシア正教の洗礼を受けてロシアに帰化、日本に帰らずロシアで生きていくことを選択した。14人の間に対立関係が生まれる中、最年長で船親父（水主の頭）だった吉郎次が病死。このときばかりは13人が心を合わせて看取り、埋葬した。

イルクーツクにいた日本人

イルクーツクには新蔵と庄蔵という2人の日本人が住んでいた。彼らは若宮丸の11年前に遭難・漂流してロシアに来た伊勢（三重県）の大黒屋光太夫の船・神昌丸の漂流民で、光太夫・小市・磯吉の3人は日本に帰ることができたが、凍傷で足を切断した庄蔵と、病気になった新蔵はロシアに残留したのだった。

新蔵は日本語教師・通訳になり、若宮丸漂流民が来るとその世話係となった。善六たちのロシア正教受洗（ロシアへの帰化）に大きな影響を与えた。

庄蔵は、若宮丸漂流民の第1グループがイルクーツクに着いたあと、彼らに看取られて息を引き取った。

4 ペテルブルグ
ロシア皇帝に謁見――帰国か残留か

イルクーツクで7年が過ぎた頃、ロシア政府は世界一周の探検航海の計画に日本との通商交渉を付け加えることを決め、漂流民たちを急きょペテルブルグに呼び出した。昼も夜も馬車で走り続ける過酷な約50日の長旅の途中、左太夫・銀三郎・清蔵の3人が病気のために落伍。ペテルブルグにたどり着いたのは10人だった。

ロシア帝国の首都ペテルブルグでは、芝居小屋、気球、プラネタリウムや巨大地球儀など当時の最先端エンターテインメントを見物。そして絢爛豪華な宮殿で皇帝アレクサンドル1世に謁見し、「このままロシアに残るか、日本に帰りたいか」と尋ねられる。漂流民たちの中には大きな不安がわき起こる。日本では海外渡航とキリスト教が厳しく禁じられていた時代。異国から帰った時、自分たちはどんな扱いを受けるだろうか――結局、帰国を望んだのは津太夫・儀兵衛・左平・多十郎の4人だけ。すでに帰化していた4人に加え、茂次郎・巳之助も洗礼を受けてロシアに残留することを選んだ。

帰らなかった人たち

ペテルブルグへの旅の途中で病気になった3人は、イルクーツクへ送り返されたらしい。彼らと、ペテルブルグに残った5人がその後どうなったのかはわかっていない。

若宮丸漂流民の足

4ロシア皇帝アレクサンドル1世夫妻★

4シベリアを横断した馬車★

3バイカル湖での網漁★

ロシア皇帝に謁見
6人がロシア残留を申し出る

働きながら7年暮らす
船親父の吉郎次が病死

ペテルブルグ

コペンハーゲン

ファルマス

モスクワ

ヤクーツク

オホーツク

バイカル湖

イルクーツク

石巻

長崎

世界一周就航船
ナジェージダ号で航海
津太夫・儀兵衛・左平・多十郎の他
残留組の善六も通訳として乗る

シベリア横断②
昼も夜も馬車で走り続け
3人が病気落伍

劇場やプラネタリウム
気球ショーなどを見物

カナリア諸島

テネリフェ島

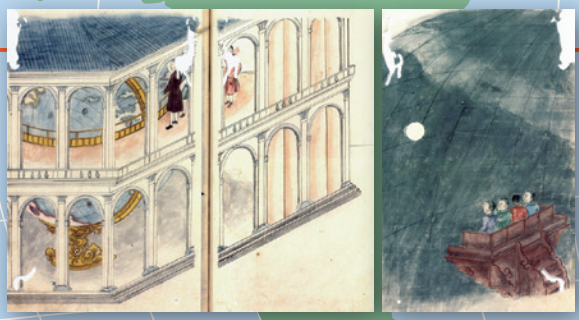
2ヶ月の幽閉生活
多十郎が自殺未遂

4人の見聞をもとに
大槻玄沢らが
「環海異聞」を著す

帰郷
津太夫・儀兵衛
左平・多十郎が
12年ぶりに
故郷に帰る

赤道を越える

4観覧車★　4劇場★



4巨大な地球儀の内部がプラネタリウムになっていた★

6長崎に停泊したナジェージダ号 九州諸藩の船に取り囲まれている★

4気球ショーの気球と見物する人々★

★印の図版はすべて宮城県図書館所蔵の「環海異聞」写本より

ペテルブルグ ← 世界周航 → 長崎梅ヶ崎 → 長崎 → 江戸 → 故郷へ

1801　1802　1803　1804　1805　1806　1807

文化元年（一八〇四）
3月27日　マルケサス諸島着
6月9日　カムチャツカ・ペトロパブロフスク入港
8月5日　ペトロパブロフスク出港
善六、下船を命じられ当地に残る
9月6日　ナジェージダ号、長崎着
上陸を許されず
11月17日　レザーノフ以下ロシア人16人と漂流民4人、上陸を許されるも梅ヶ崎仮館に軟禁
12月17日　多十郎、自殺未遂

文化2年（一八〇五）
3月6日～9日　3回にわたる日露会談
3月10日　漂流民4人、日本側に引き渡される
3月19日　ナジェージダ号、長崎を出航
10月20日　漂流民4人、仙台藩に引き渡され江戸に向かう
12月18日　漂流民4人、江戸到着
12月20日　江戸仙台藩邸で藩主の伊達周宗に謁見
12月25日　大槻玄沢・志村弘強、漂流民の尋問を始める

文化3年（一八〇六）
2月下旬　取り調べを終え、漂流民4人、江戸を発ち故郷に帰る
4月1日　多十郎、室浜で病没（36歳）
9月3日　儀兵衛、室浜で病没（45歳）

文化4年（一八〇七）
4月　大槻玄沢、『環海異聞』を藩主の伊達周宗に呈上
7月26日　津太夫・左平、箱館で若年寄の堀田正敦（周宗の後見人）蝦夷地巡検の際、ロシア情報を提供

文化10年（一八一三）
9月19日　善六、ゴロウニン事件解決交渉のロシア側通訳として箱館に上陸

文化11年（一八一四）
7月29日　津太夫、寒風沢で死去（70歳）

文政12年（一八二九）
4月12日　左平、寒風沢で死去（67歳）

辰蔵に加え、茂次郎・巳之助もペテルブルグで洗礼を受けてロシアに帰化し、残留する
7月4日　ナジェージダ号、デンマーク・コペンハーゲン着
8月13日　イギリス・ファルマス着
9月5日　カナリア諸島テネリフェ島着
11月8日　ブラジル・サンタカタリーナ島着

跡と彼らが見たもの

若宮丸漂流民年表

※日付は和暦（旧暦）

イルクーツク　オホーツク　アリューシャン列島　漂流

1793　1794　1795　1796　1797　1798　1799　1800

寛政5年（一七九三）
11月27日　若宮丸、江戸を目指し石巻出港
11月29日　若宮丸、塩屋崎沖で遭難

寛政6年（一七九四）
5月10日　若宮丸、アリューシャン列島の小島に漂着
6月8日　船頭の平兵衛死亡
6月13日　漂流民15人、ナアツカ港到着

寛政7年（一七九五）
4月3日　ナアツカ出港
6月28日　漂流民15人、オホーツク着
8月18日　儀兵衛・善六・辰蔵、オホーツク発

寛政8年（一七九六）
1月24日　儀兵衛・善六・辰蔵、イルクーツク着
3月　善六・辰蔵、洗礼を受けロシアに帰化
5月上旬　佐太夫・左平・銀三郎・茂次郎・多十郎、オホーツク発
7月3日　吉郎次・津太夫・民之助・市五郎・八三郎・清蔵・巳之助、オホーツク発
10月23日　市五郎、ヤクーツクで死去
11月　佐太夫・左平・銀三郎・茂次郎・多十郎、イルクーツク着
12月　吉郎次・津太夫・民之助・八三郎・清蔵・巳之助、イルクーツク着
民之助・八三郎、洗礼を受けロシアに帰化

寛政11年（一七九九）
2月28日　船親父の吉郎次、死去
11月27日　若宮丸船主米沢屋平之丞、石巻禅昌寺で七回忌を行い、供養碑を建立

享和2年（一八〇二）
7月22日　ロシア政府、世界周航船ナジェージダ号と僚船ネヴァ号の派遣を正式決定（世界周航探検隊長兼遣日修好使節レザーノフ、ナジェージダ号艦長クルーゼンシュテルン）

享和3年（一八〇三）
3月7日　漂流民13人、サンクトペテルブルグに向け出発
3月9日　佐太夫・清蔵、病気のため落伍
4月上旬　銀三郎、ペルミで病気のため落伍
4月26日　漂流民10人、ペテルブルグ着
5月16日　漂流民10人、アレクサンドル1世に謁見
6月17日　帰国を希望した儀兵衛・津太夫・左平・多十郎と通訳の善六、ナジェージダ号でクロンシュタット港を出帆
すでに帰化していた民之助・八三郎・

5 大西洋－太平洋－カムチャツカ
ナジェージダ号で世界一周

遣日修好使節レザーノフを隊長とする世界周航船ナジェージダ号（ロシア語で「希望」という意味の名）には、帰国する4人のほかに、ロシアに帰化した善六も通訳として乗った。

大きな希望をもってペテルブルグのクロンシュタット港を出たナジェージダ号は、デンマークのコペンハーゲン、イギリスのファルマス、スペイン領カナリア諸島のテネリフェ島を経て大西洋へ。赤道を越えてブラジルのサンタカタリーナ島に立ち寄り、南アメリカ大陸南端のホーン岬へ向かう。ここは世界最大の海難区域で、猛烈な西風と海流に押し戻され、もう少しで南極まで流されそうになるが、なんとか太平洋に出る。南太平洋のマルケサス諸島（マルキーズ諸島）では、身長2m、全身に入れ墨をして人間の頭蓋骨（ずがいこつ）を持った住民の姿に驚く。それからもう一度赤道を越え、ハワイ諸島からカムチャツカ半島のペトロパブロフスクまで広い太平洋を渡りきった。約1年3ヶ月の世界一周航海だった。

寄港地では多十郎だけが必ず船を降りてその土地を見物したが、他の漂流民は船から出なかったという。

ペトロパブロフスク港で通訳の善六は船から降ろされる。キリスト教徒になった彼を日本に連れて行くのは、通商交渉にとっても善六にとってもリスクが大きいという判断だった。

6 長崎
日露交渉と2ヶ月の幽閉生活

文化元年（1804）9月6日、漂流民4人を乗せたナジェージダ号は長崎に着いた。しかし長崎の役人は突然現れたロシアの軍艦に態度を決めかね、上陸を許したのは2ヶ月後だった。漂流民たちは11年ぶりに日本の土を踏んだが、使節レザーノフらとともに出島に近い梅ヶ崎の仮館から一歩も外に出してもらえなかった。

通商交渉も漂流民の受け取りも進展しない中、多十郎が小刀を喉に刺して自殺を図る。一命は取りとめたが、この後亡くなるまで口をきくことはなかったという。

長崎に着いて半年後、幕府は漂流民4人の受け取りだけをみとめ、通商は一切拒否してロシア人を追い返した。

7 寒風沢・室浜
そして故郷へ――12年ぶりの帰郷

津太夫たち4人の漂流民は長崎で2ヶ月の取り調べを受けた後、仙台藩の役人に引き渡され江戸へ向かう。そこでまた仙台藩の学者大槻玄沢（おおつきげんたく）と志村弘強（しむらひろゆき）に尋問され、文化3年（1806）、ようやく故郷の寒風沢や室浜に帰り着いた。若宮丸で石巻を出てから12年。故郷では乗組16人全員が死んだものとあきらめ、出港の日を命日として七回忌には立派な供養碑まで建てていた。

長崎で自殺を図った多十郎は帰郷してすぐ、文化3年（1806）4月に亡くなった。彼がロシア皇帝から下賜（かし）されて持ち帰ったというラシャ製の上着は、若宮丸漂流民の唯一の遺品として今も残されている。

多十郎と同じ室浜出身の儀兵衛も同年9月に病没。

津太夫と左平は、文化4年（1807）幕府の若年寄、掘田正敦（ほったまさあつ）の蝦夷地（えぞち）巡検の際、箱館（はこだて）（函館）でロシア情報を提供した。

4人のうち最年長でまとめ役だった津太夫は帰郷から8年後に70歳で、左平はその15年後に67歳でこの世を去った。

江戸時代のベストセラー
『環海異聞（かんかいいぶん）』

江戸の仙台藩邸で津太夫たちから聞き取りを行った大槻玄沢と志村弘強は、漂流民たちの漂流から世界一周までの驚くべき体験と見聞を、たくさんの絵図も加えて『環海異聞』全15巻にまとめた。世界の様子を知ることが難しかった時代、『環海異聞』は貴重な情報源として注目を集め、日本全国で150以上の写本が作られた。

また、漂流民たちは海外での見聞を人に話すのは禁じられていたが、親しい人などに語った話がいくつもの書物としてまとめられ、これらも写本が作られた。

若宮丸の物語は、江戸時代には幕府をはばかって一度も出版されなかったが、知識人の間では広く知られ、異国で長く生活した漂流民たちがもたらした情報は、日本が世界への認識を改めるうえで大いに役立った。

7「環海異聞」表紙★

ロシア人通訳として生きる
キセリョフ善六の決意

ナジェージダ号に乗った善六は、世界一周航海のあいだレザーノフに日本語を教え、露日辞書を作った。また、ペトロパブロフスクで降ろされたあと、ちょうどその時に漂流してきた慶祥丸（けいしょうまる）の乗組員が日本に帰るのを助けている。

その後、レザーノフの通商交渉決裂をきっかけとして日露関係が悪化し、文化8年（1811）にゴロヴニン事件が起きる。文化10年（1813）、高田屋嘉兵衛（たかだやかへえ）とリコルドがこれを解決するために来日したとき、善六もロシア側通訳「キセリョフ善六」として箱館（函館）に上陸した（キセリョフはロシアでの姓）。リコルドは日本の役人がいる交渉の場に善六を立ち会わせることをためらったが、善六は「私は日本人ではありません。通訳としてのつとめを果たさせてください」と言ってリコルドを感激させたという。

その後、キセリョフ善六はイルクーツクで暮らしたらしい。

通訳としてロシア人とともに函館に上陸した善六（右端）

訪ねてみよう！若宮丸漂流民と千石船の時代

アクセスマップはこちら→
営業時間等を各施設にお問い合わせの上おでかけください

若宮丸遭難供養碑

桂林山 禅昌寺 石巻Ⓐ

寛政５年（1793年）に遭難した若宮丸の七回忌に際して、寛政11年（1799年）、船主の米澤屋平之丞（船頭平兵衛の父）が建立した供養碑。

高さ3.23mという大きなもので、船主の悲しみと財力の大きさを偲ばせる。建立の６年後、世界一周をして帰ってきた津太夫たち４人は、この供養碑をどんな気持ちで見たのだろうか。

その後この石碑は倒されたらしく、境内にある石橋の土台として使われていたが、平成元年（1989年）、参道敷石工事の際に発見され、漂流民たちを偲んで再び境内に建立された。

平成５年（1993年）11月23日には、ここで若宮丸乗組員海難遠忌供養祭が行われている。

〒986-0873　宮城県石巻市山下町1-4-8
Tel：0225-95-7255

多十郎のジャケット

奥松島縄文村歴史資料館 宮戸Ⓔ

▲大正時代に撮影されたジャケット

宮戸島・室浜出身の多十郎がロシア皇帝から下賜されて持ち帰ったとされる上着。若宮丸漂流民唯一の遺品。

旧鳴瀬町（現・東松島市）の子孫の奥田家に長く伝えられてきたが、現在は東松島市指定有形文化財として奥松島縄文村歴史資料館が保管・展示している。

〒981-0412　宮城県東松島市宮戸字里81-18
Tel：0225-88-3927　www.satohama-jomon.jp

日和山（ひよりやま）

日和山公園（ひよりやま） 石巻Ⓑ

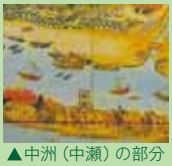
日本全国にはたくさんの「日和山」がある。船の航行が天候に大きく左右された時代、雲・風・波・潮などを見るため湊近くの小高い丘などが「日和山」と呼ばれて整備された。

石巻の日和山からは、若宮丸が出帆した石巻湊のあった旧北上川河口を見下ろすことができる。

〒986-0833 宮城県石巻市日和が丘２丁目2
Tel：0225-95-1111　www.city.ishinomaki.lg.jp

陶板壁画「石巻港絵図」

石巻グランドホテル２階ロビー 石巻Ⓒ



▲中洲（中瀬）の部分

安政年間（1854～1859年頃）の石巻湊を描いた絵図をもとにした陶板壁画。旧北上川河口に出入りするたくさんの千石船や、河岸にぎっしり並ぶ蔵など、かつての石巻湊の賑わいが偲ばれる。

※見学ご希望の方は、１階ロビーにお申し出ください。

〒986-0827 宮城県石巻市千石町2-10
Tel：0225-93-8111（代表）
www.grandhotel.bz/

善六味噌

まねきショップ 石巻Ⓓ

石巻出身の善六にちなんだ「善六味噌」をオリジナル商品として販売している。

善六のふるさとの味、仙台味噌を味わいながら、善六たち帰らなかった12人の漂流民たちにも思いをはせてほしい。

この「まねきショップ」は、東日本大震災で大きな被害を受けた門脇町の地域コミュニティのためにオープンしたお店。食品・雑貨を販売するほか、テーブル席では喫茶・軽食も提供している。（時間帯によっては売切れの場合もあり）

〒986-0834　宮城県石巻市門脇町2-10-1
@manakikadonowaki

儀兵衛・多十郎の墓碑

東渓山 観音寺 宮戸Ⓕ

宮戸島・室浜出身の二人、多十郎の墓（左）と、儀兵衛の供養碑（右）。それぞれに多十郎の戒名「本由住良信士」と儀兵衛の戒名「長流来見信士」が刻まれている。

もともとここには二人の墓はなかったが、室浜の別の場所にあった多十郎の墓が2003年道路拡張のためにここへ移された際、住職が一緒に帰還した儀兵衛の供養碑を隣に建て、さらに「日本最初の世界一周者の墓碑」と書いた標識も作った。

〒981-0412　宮城県東松島市宮戸字門前13
Tel：0225-88-2239

日和山・十二支方角石・しばり地蔵

日和山展望台 寒風沢Ⓗ

日本全国の日和山には東西南北を記した「方角石」が今も残されているところがある。津太夫と左平の故郷、寒風沢の日和山にも「十二支方角石」があり、十二支で東西南北が示されている（子が北）。ただし、津太夫・左平の時代よりも後の天保12年（1841年）に建てられたもの。

また、「しばり地蔵」は、良い風が吹けば出帆してしまう船乗りたちを引き留めるため、遊郭の遊女たちが逆風を祈願して荒縄で縛ったと伝えられる。これに似た地蔵も各地にあるが、「日和山」「方角石」「地蔵」が３つ揃うのは全国でも３か所だけ。風待ち湊として栄えた昔を物語る貴重な場所である。

※標高22.2mのため、ちょっとした登山。車椅子や足腰に自信のない方にはアクセス困難。

〒985-0194 宮城県塩竈市浦戸寒風沢湊

「環海異聞」写本

宮城県図書館 仙台Ⓙ

最も原本に近いとされる「環海異聞」写本は宮城県図書館が所蔵している（閲覧は事前申し込みが必要）。

〒981-3205　宮城県仙台市泉区紫山1-1-1
Tel：022-377-8441（代表）
www.library.pref.miyagi.jp/

儀兵衛・多十郎オロシャ漂流記念碑

儀兵衛・多十郎記念碑の丘 宮戸Ⓖ

▲記念碑の背面

日本人で初めて世界一周した４人のうち、室浜出身の儀兵衛と多十郎の長い苦難の旅を伝える記念碑。背面には彼らのたどった世界周航図が描かれている。

室浜の漁港を見下ろす高台にあり、眺望も楽しめる。

※遊歩道は整備されているが車椅子などではアクセス困難。

〒981-0412　宮城県東松島市宮戸字鹿嶌

津太夫・左平らの菩提寺

松林寺 寒風沢Ⓘ

▲化粧地蔵

帰郷した津太夫・左平と、帰らなかった左太夫・銀三郎・民之助。寒風沢出身の若宮丸漂流民５人の菩提寺。寺の過去帳には津太夫の名がある。

この松林寺は、子宝祈願の「化粧地蔵」があることでも知られる。

〒985-0194　宮城県塩竈市浦戸寒風沢字愛宕1
Tel：022-369-2203

紙芝居「初めて世界一周した日本人 若宮丸漂流」

東松島市図書館 矢本Ⓚ

東松島市図書館の紙芝居ボランティアサークルが作成した大型紙芝居「初めて世界一周した日本人 若宮丸漂流」（松本昭英 原作・画／ときわひろみ 監修・補作）を所蔵。通常版の紙芝居は閲覧・貸出が可能。

〒981-0503　宮城県東松島市矢本字大溜1-1
Tel：0225-82-1120
http://www.lib-city-hm.jp

「初めて世界一周した日本人展」パネル

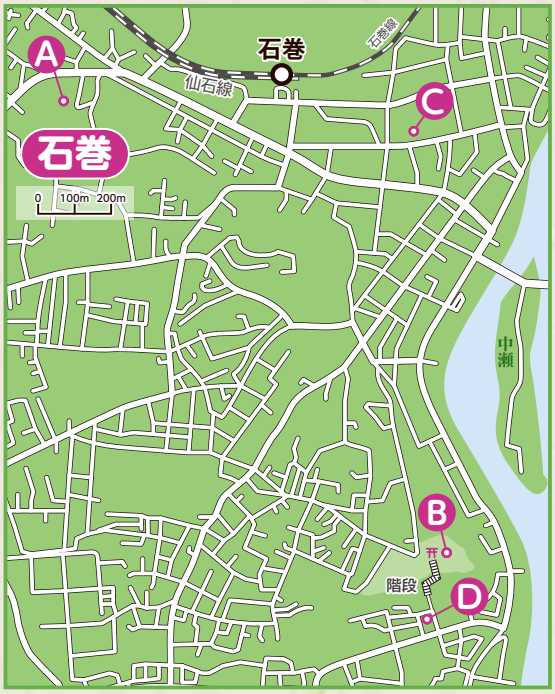
海商の館 旧亀井邸 塩竈Ⓛ

2009年11月にNPOみなとしほがまが開催した「鎖国の時代に世界一周した若宮丸の津太夫と左平」展で使われたパネルを、鹽竈（しおがま）神社の東参道脇にある「和洋併置式」の歴史的建造物「旧亀井邸」で年に数回展示（詳しくは要問合せ）。

〒985-0051 宮城県塩竈市宮町5-5 亀井邸
Tel：022-364-0686　kameitei.da-te.jp

若宮丸漂流民のふるさと 探訪マップ
石巻・宮戸・寒風沢

← 見どころの説明は中面をご覧ください



仙台駅からのアクセス 所要時間は目安です

石巻（いしのまき）

仙台 —JR東北本線 石巻行 快速 57分（またはJR仙石線 85分）— 石巻

A 若宮丸遭難供養碑　**桂林山 禅昌寺**
石巻駅から 徒歩12分

B 日和山(石巻)　**日和山公園**
石巻駅から 徒歩25分 車で6分

C 陶板壁画「石巻港絵図」　**石巻グランドホテル**
石巻駅から 徒歩5分

D 善六味噌　**まねきショップ**
石巻駅から 徒歩25分 車で6分 ／ 日和山公園の鳥居下の階段からは徒歩5分

宮戸（みやと）

仙台 —JR仙石線 40分— 野蒜（のびる） —タクシー（または徒歩）— 宮戸島

E 多十郎のジャケット　**東松島縄文村歴史資料館**
野蒜駅から 車で10分（約5kmの道のり）

F 儀兵衛・多十郎の墓碑　**東渓山 観音寺**
野蒜駅から 車で12分（約7.5kmの道のり）

G 儀兵衛・多十郎オロシャ漂流記念碑　**儀兵衛・多十郎記念碑の丘**
野蒜駅から 車で15分（約8.8kmの道のり） ＋ 山道を徒歩5分

寒風沢（さぶさわ）

仙台 —JR仙石線 28分— 本塩釜 —徒歩 8分— マリンゲート塩釜（桟橋1番のりば） —塩竈市営汽船 46分— 寒風沢

H 日和山(寒風沢島)・十二支方角石・しばり地蔵　**日和山展望台**
汽船のりばから 徒歩6分 ＋ 山道を徒歩3分

I 津太夫・左平らの菩提寺　**松林寺**
汽船のりばから 徒歩6分

塩竈市営汽船webサイト

その他 広域図を参照

J 「環海異聞」写本　**宮城県図書館**
仙台市地下鉄「泉中央」駅から宮城交通バスで20～30分「宮城県図書館前」下車

K 紙芝居「初めて世界一周した日本人 若宮丸漂流」　**東松島市図書館**
JR仙石線矢本駅から徒歩15分（東松島市コミュニティセンターとなり）

L 「初めて世界一周した日本人展」パネル　**海商の館 旧亀井邸**
JR仙石線「本塩釜」駅から徒歩8分

発行：石巻若宮丸漂流民の会
〒236-0052 神奈川県横浜市金沢区富岡西2-21-23 大島幹雄方
Tel&Fax：045-773-4643　メール：izj00257@nifty.com
http://deracine.fool.jp/wakamiya

協力：特定非営利活動法人NPO みなとしほがま
〒985-0016 宮城県塩竈市港町1-4-1
Tel：080-1833-3710
メール：minatoshiogama@canpen.info

協賛：
まねきショップ・本間家土蔵
石巻学プロジェクト

掲載図版のうち★印はすべて宮城県図書館所蔵の「環海異聞」写本です。

作成：大野康世

©石巻若宮丸漂流民の会 2020年8月発行